

Always 「K2P2エッセイ」～クミジョとクミダンのるつぼ～

【第2回】 スタートは『労働調査』から

本田 一成 ●武庫川女子大学教授 K2P2 共同代表

連合栃木の全面的な協力を得て2020年に『とちぎクミジョ白書2019』（栃木県における女性労働組合役員の実態と意識に関する調査報告書）を発行した。それを名刺代わりにして、クミジョ・クミダン問題の研究と活動を始めた。だが、実はその前に本誌に研究ノートに掲載してもらっている（「試論「男女平等からクミジョへ」～「クミジョ白書」のためのノート～」『労働調査』2020年9月号）。難なくこのノートが書けたのは、「ヤミ研」をやっていたからである。

読み返してみると、さあ日本初のクミジョ白書を出そう、という誠実な意気込みを見せながらも、暗澹たる気持ちで満々になっていたことを思い出した。とにかく先行研究が乏しい。労使関係研究、労働組合研究と言え、戦後から重厚な蓄積があるはずであった。だが、労働界の女性の話は、棚上げ、タブー、永遠の課題、日本昔ばなし、みたいで、こんなに消されて耕していない研究領域って他にある？

男性型組織であることが労組の衰退に拍車をかけていることを自覚して反転させようと努力するクミダンやリーダーがいる一方で、この問題を避けるようにして絶対に持ち出さない労組があるのは、どうして？

わずかだが貴重な研究を生かして進めよう（その後、案外に先行研究を発掘できた）、研究だけでなく実践活動もやろう、なかったことにするのはやめよう、笑われても嫌われてもいいや、と思ったスタートラインがこのノートであった。書いた通りにアンケート調査、インタビュー、講演、意見交換会、原稿執筆、雑誌連載などを強行した。そのため、受け入れがたい話だ、こういう話は好きじゃない、と本当に嫌われ、憎まれてしまい、めげることもあった。

しかし、全国のクミジョ、クミダンとの交流が増えて、毎日のようにやりとりして現実がわかってくると、あながち間違いではないな、と気づいた。いたずらに男女対立を煽るのはやめろ、とお叱りを受ける時があるが、そんな甘いものではない。どうみても、とくにダンジョの対立があり、ダンダン間の対立もある。見えていないの？ そう言われたくないだけ？ それにいたずらなんかじゃない。労働界の将来のために、男性型組織から抜け出して違う景色をみたいクミダンだっているのである。

ノートで予告したクミジョ白書は、『とちぎクミジョ白書2019』と『同2021』として結実した。2025年には『K2P2白書2024』の発行にこぎつけることができた。いずれも、見えなかったものを見せたので、とてもしんどかった。この話はいずれ書こうと思う。（続く）